



巻 頭 言

定 点 観 測

(財)日本植物調節剤研究協会 理事 東海支部長 片岡 一男

この巻頭言を執筆することになって、平素の問題意識の不足から、主題の決定に迷い、草稿を前に苦吟していたとき、兵庫県南部地震が発生した。この阪神大震災は、戦後最大の犠牲者を出すなど、被災者にとっては極めて辛いことになっている。一日も早い復興を祈るとともに、改めて「自然に対する畏怖」を呼び起こした。

日本列島は、地震だけでなく、台風・豪雨など自然の脅威に、いつもさらされている。都市の機能整備を進めるあまり、国土の約4%の面積に総人口の26%がひしめく構造となっている日本列島なるがゆえに、災害に対するもろさがあるといわれる。大都市集中の是正は、「百年河清を待つ」ようで、半ば諦めに近いものになりつつあったが、この災害を機に「災害に強い国土作り」のために地方・農村対策を含めた総合対策が、本格的に進められることを期待する。

農業は、絶えず自然の影響をもろに受ける。自然災害と闘い、回避し、克服し、時には災害となじみながら何千年の歴史を保ってきた。一昨年の冷夏と日照不足、昨年的高温と水不足も近年稀にみる異常気象であった。しかも、その落差は想像できないほど大きかった。

昨年の水不足に際しては、少ない水を有効かつ平等に配分するために努める「ムラの人々」の姿をあちこちで目にした。そして、史上稀にみる大豊作となり、また除草剤使用の上でも、大きな問題を起こさずに済んだという。

こと農業用水に関しては、「ムラの生命」といわれ、先人は「水と土木の技術者」として遺産を残し、代々伝承されてきた。近年、その断絶を愁うる声を耳にするが、昨年の農村を見る

限り、なお底辺のところでは脈々と受け継がれている思いがした。ただ、「ムラぐるみ」ではなく、誰かが中心となる新しい仕組みに変わりつつあるが。

阪神大震災の復興を目指し、隣人仲間が小さな組織を作って力強く立ち上がる被災地の皆さんの姿と共通するものを見て、稲作文化で築かれてきた日本人の底力を窺い知った。そして、そこにこそ新しい社会を創っていく原点があるという思いを深くした。

わが国の水田が、かつての姿に逆戻りすることは先ずあり得ない。生活を維持・発展させるために改善を加えたのが今の姿であり、今後も生活を基盤とした変化の生ずるのは当然のことである。変わっていいもの、変わらずに残るもの、また新しく生れるものがある。消えることを憂い、消さないことのみを論ずるよりも、消してはならないものの新しい姿での盛り上がりを求め、その道筋を拓くことこそが重要だと思う。

「定点観測」は、いろんな場面で使われる観測法である。そこに立てば、世の移り変わりがよく見える。変わらないものもよく分かる。

古きよき文化と変転きわまりない現世との対比をみるにはまたとない観察方法ではある。どこに立つかによって、観察結果に差が生れる。「コメ」をめぐる情勢の激変とそれに係わる人々の生き方が多様化している現今にあって、その「定点」は、たくましく生きる「ムラの人々」の中にこそある。今、現場に入り、定点観測を行う「現場の農業技術指導者」のもたらす情報に寄せる期待は大きい。変革期にある除草剤使用技術についても、また然り。